



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1995 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

信仰の模範 マリア

(聖母被昇天の祝日に)

★ 「幸せなこと、信じた人は。」 (ルカ1・45)

祝された処女マリアの被昇天の大祝日に当たり、典礼はザカリアの家へと私たちをいざないます。その家の門口で、マリアはいとこエリザベトに迎えられました。エリザベトの言葉は、後に教会が大天使ガブリエルのあいさつの言葉に加えて、「めでたし」という祈りにしたものです。「あなたは女の中で祝福された方で、あなたの胎内に実るものも祝福されています。」 (ルカ1・42)

エリザベトはマリアを「主の御母」(1・43)として迎え、人間の目からは不可能とも不可解とも見える天使のお告げを受

諾したナザレトの処女の信仰を称えます。「ああ幸せなこと、主から言われたことの実現を信じた方は。」 (1・45) (…)

信仰によって神の愛を知り、悪と戦う

★ エリザベトのあいさつに對し、マリアは「マニフィカト」の言葉で答えます。

「全能者が私に偉大なことをされたからです。その名は清く。」 (1・49)

追うため黙想してみましよう。実際、信仰とは、ただ神を無限に完全なもの、限りなく遠い存在として漠然と了解するに止まるものではありません。信仰とは、「全能者が偉大なことをなさった」と悟ることでもあるのです。「偉大なこと」どもは、創造の秩序においても、さらには贖いの秩序においても、賜の第一の源としての神について語りかけています。その源は、愛と呼ばれます。「神は愛である。」 (1ヨハネ4・8) まさしく愛によって、愛のために「主はあなたたちを富ませるために、貧しい者となられた。」 (IIコリント8・9) ナザレトの処女はこの真理を深く悟り、マニフィカトの中に言い表わしました。マリア自身は「貧しい者」の中で最初に、生ける神が自ら、これ以上はないというほどに近づいてくださった者です。

★ 処女マリアの被昇天を祝う荘厳な典礼は、黙示録の言葉を用いて、竜と戦う婦人の姿を伝えます。こうして、聖書の最終章は最初の章である創世の書とつながっているのです。神の愛に絶大な信頼をおいたマリアは、人類と教会の歴史を通じて、ある意味で悪に對するこの戦いの中心にあります。神とその全ての愛と恩寵、賜、聖性にはむかう「あの昔のへび」(黙示録12・9、すなわち創世の書に出てくるへび)、闇の王との戦いです。

★ 「勝利はすなわち私たちの信仰」なのです。(1ヨハネ5・4参照) 本日の典礼は、エリザベトに「幸いなこと、信じた方は」と称えられた人の、最後の勝利を祝います。

★ 「全能者が私に偉大なことをされた。」ご訪問の際のこの言葉はマリアの被昇天という秘義で最終的に確認されました。「これからのち、代々の人々は私を幸いな女と呼ぶことでしょう。」 (ルカ1・48) 公会議は述べています。「最

後に、原罪のいかなる汚れにも染まらずに守られていた汚れのない処女は、地上の生活の道程を終えて肉身と靈魂ともども天の榮光に引き上げられ、そして主から、すべてのものの女王として高められた。それは、主なる者の主であり(黙示録19・16参照)、罪と死の征服者である自分の子に、マリアがよりよく似たものとなるためであった。」(教会憲章、59番) さらに、「教会は聖なる処女において、すでに完成に到達しているが、キリスト信者はまだ罪を克服し聖性において成長するよう努めている。従って信者は、選ばれた人々の全共同体に對して諸徳の範型として輝くマリアを仰ぎ見る。」(65番)

「生命の文化」と家庭

（教皇様は、家庭評議会の招聘でローマを訪れたアジア地域の司教家庭委員会のメンバーと会見された。）

（…）「家庭は新たな福音宣教のなめです。」豊かな伝統文化と広大な面積、人口を擁するアジア地域を見るにつけ、教

会は「小さな群れ」そのものであり、今の言葉が実によく当てはまると思います。キリストの福音を家庭の中で、家庭の中から、新たな熱意と力を込めて宣べ伝えなければなりません。キリストにおいて、家庭は結婚に基づく真の共同

体、生命と愛の交わりであり、安定し、生命を受け入れはぐくみ、「良い知らせ」なかんずく「家庭の福音」を力強く生き生きと証し、宣言します。家庭による証しは、まず何よりも互いに自分を与え合い、人生を喜びと意義ある内容で満たす夫婦間の忠実に基づきます。婚姻の秘跡を通して結ばれたキリスト者の家庭には、花婿であり、人間と神の仲介者である私たちの救い主イエズス・キリストが現存し、働いておられると

教会は宣言します。生命の主は家庭を生命の聖所とされたのです。この数日間、皆さんは貧困、移住、人口抑制政策などアジアの家庭が直面している数々の難問について見てこられました。そして再び、個人と民族と国家の福利は直接に家庭の福利の上に築かれるという結論に達したのです。実際、回勅「生命の福音」で述べたように、生命の文化と家庭との間には最も深い関係があ

ります。（92番参照）社会の基本細胞である家庭が脅かされれば、生命そのものも大きな打撃を受けます。家庭は死の文化に抵抗し、打ち勝たねばなりません。死の文化は至る所に広まり、時にはひそかに、時にはあからさまに人権を無視し、生命の尊さを否定しています。さて、特にアジアにおいては、家庭に基礎をおいた生命の文化を築くための努力が、教会一致と宗教間の協力のための実りある分野を提供しています。「紀元二千年を目前に…生命の価値を信じる全ての人の協力で努力のみが、予期できない文明の衰退を防ぐことができる。」（同91番）



「主があなたに面を向け平和を与え給うように。」（荒野の書6・26）この聖書の一句と共に、心から皆さんにご挨拶を送り、神が家庭に、国家に、そして全人類に平和の恵みをお与えくださるよう祈り求めたいと思います。

主よ、平和をお与えください！これは、行動と熱意をもって絶えず求めるべき私たちの願いです。一刻も早く平和を打ち立てねばならない。そのことを思い出す機会には事欠きません。たとえば今年、あの痛ましい第二次世界大戦から五〇年目を迎えます。広島・長崎の恐るべき悲劇が同時代の人々の心に刻まれてから、すでに半世紀がたつのです。

これらのことを思い返しつづ、まだ不幸にも戦闘の続く世界各地の様子を見るにつけ、地球上の至る所に平和がもたらされるよう、心から願わずにいられましようか。幼子となつて揺りかごにおられる主に対し、私

す者となれますように。国際家族年であった昨年（同91番）に引き続き、今年訴えたのは「女性：平和の教師」というテーマです。人間生活のあらゆる面にわたつて影響を及ぼす、平和をもたらし上での女性

の政治、そして何よりも争いや戦争のある所で、平和を証し、伝え、説く者となつてくださいますように。聖マリア、大きな使命を帯びた女性たちをお導きください。西暦二千年に近づきつつある今、教会は「神の御母」、「平和の君」の御母を呼び求めます。マリアよ、国々の指導者が話し合いによって和解を成立させることができるよう、善意の人々の努力をお導きください。家庭で、社会で、あらゆる場所で、生まれながらに「平和の教師」としての召命を受けた女性たちをお助けください。（九五五年の元日に、聖ペトロ広場にて。）

家庭のための司牧的な配慮と生命の保護に関わる全てのことがまず第一に大切であることはよく存じています。皆さんの教区での司牧方針においてもそうです。今回のローマ滞在中、皆さんの助けになれば幸いです。全能の神がアジアの家庭を愛し、保護されるよう心から祈ると共に、カトリック者の家庭が愛と信仰において成長し、ナザレトの聖家族の模範に倣うことができるよう、主に願います。皆さんに使徒の祝福を送ります。（九五・五・二六）

女性に平和の教師

●女性年にあたって

私たちは熱心に祈りたいと思えます。和解と真の平和を世にもたらしするためにおいでになった「平和の君（イザヤ9・5）」よ、どうぞ平和をお与えください。そして私たちが、平和をもたら

の重大な貢献について強調したいと思えます。女性の皆さん、あなた方の存在と行動の全てを賭けて、「平和の教師」となつてください。人と人、世代間、家族間で、文化、社会、国家間

霊的読書のためのテープ・コレクション……「祈り方」・「神の現存」（フランシスコ・ルナ著）「十字架の道行」・「聖性を目指して」・「マリアを通してイエズスへ」（ホセマリア・エスクリバール著）

★お申し込み、お問い合わせは精道教育促進協会まで。

赦し合うことによって 恒久の平和が築かれる

★ボスニア・ヘルツェゴビナの人々のためのミサにて

1 「天にましますわれらの父よ：」 この祭壇のも

とで、私たちはサラエボの全教会の人々のそば近くにいることを感じます。私たちが宣言するのは生ける神の子・御父と等しい御子キリストの言葉です。神を「父」と呼べるのは（アツバ、父よ：わが父よ）キリストのみ、私たちが神を「われらの父」と呼ぶことができるのは、キリストを通じてのみです。冒頭に掲げたこの祈りはキリストがお教えになったものですが、ここには全てが含まれていません。私たちはこの祈りの内に、歴史の中のこの瞬間にこのサラエボで、父なる神に申し上げることができ、また申し上げるべきことを見出します。「天にましますわれらの父よ、御名の尊ばれんことを。御国の来たらんことを。御旨の天に行われる如く、地にも行われんことを。」

2 われらの父よ！ 人類の父、諸民族の父、この世に生きる全ての人々の父。ヨロツパとバルカン半島の諸民族

の父。南スラブ族に属する人々、この半島で何百年もの間、自らの歴史を綴ってきた諸国民の父。不幸にも再度の戦争と激変に見舞われている人々の父。「われらの父よ：」ローマ司教として、最初のスラブ系教皇として、私は御前にひれ伏し、祈ります。「災厄、飢え、戦争からお救いください！」サラエボやボスニア・ヘルツェゴビナばかりでなく、国境を越えてヨーロッパ各地で多くの人が私と共に懇願の祈りを捧げています。数えきれない大勢の兄弟姉妹たちの心と口から出る祈りを私は携えてきました。彼らは神の民である教会と共に祈る機会をずっと待ち受けていたので、私自身も長い間、全ての人がこの祈りに心を合わせてくれるよう呼びかけてきました。（…）バルカン半島、旧ユーゴスラビア共和国での悲劇の始めから、平和への祈りは全教会、特に聖座の関心事でした。神の御旨は地上の平和

3 「父よ、御名の尊ばれんことを。御国の来たらんことを。」慈愛深く聖なる御名が人々の上に輝きますように。神は暴力や敵意を喜ばれません。不正と利己主義を退けられます。全ての人が兄弟となつて、神を父と認めることをお望みです。

御父よ、全人類の父よ、「御旨の天に行われる如く、地にも行われんことを。」父の御旨とは、平和に他なりません。「私たちの平和はキリストである。」（エフエズ

4 「私たちが平和はキリストである。」（エフエズ

2・14）キリストは神に立ち返り、「父」と呼ぶことをお教えになりました。キリストの御血は罪と分裂を克服し、その十字架は人類を互いに異邦人のように分け隔てていた大きな壁を打ち倒したので、キリストは人類を神と和解させ、人々を兄弟同士として一致させました。

ですから、キリストは十字架にかかる前、使徒たちに向かつて「私はあなたたちに平和を残し、私の平和を与える。私はこの世が与えるようにしてそれを与えるのではない」（ヨハネ14・27）と仰せになったのです。主は真理の霊が来ることを約束されましたが、それは同時に、愛と平和の霊でもありまし

た。

聖霊、来たり給え！「信者の心に満ちたまえ、主の愛熱の火をわれらに燃えしめたまえ。」

聖霊、来たり給え！ 私たちはサラエボから、異なる文化と国家の出会う緊張に満ちた地、今世紀初頭に第一次世界大戦の発火点となったこの地から、聖霊を呼び求めます。今世紀が終わろうとする今、同様の緊張状態が深まり、共に力を合わせて共存し、働くために集まった諸民族が追い散らされようとしています。

平和の霊よ、来たり給え！御身を通じ、私たちは「アツバ、父よ」（ローマ8・15）と叫びます。

5 「われらの日用の糧を今日われらに与え給え。」

パンを求める祈りは、生きるために必要な全てを求める祈りでもあります。神の創られた全てのものを全ての人々の間で分かち合うという原則が、個々の人間や民族への富の分配という形で実現されるよう祈ります。富を用いて武器を持つことにより、人類が築き上げた最良の文化遺産が傷ついたり、破壊されたりすることのありませんように。紛争を避けるために必要

と思われる規制手段が非人道的な苦しみを無防備な一般大衆に

与える結果となりませんように。全ての人、全ての家庭が「日用の糧」を受ける権利を持っているのですから。破壊を広げてはならない

6 「われらが人に赦す如く

われらの罪を赦したまえ。」この一句は、重大な点に触れています。キリストご自身がそれをお教えになりました。十字架上で死去される時、ご自分を死に渡す者たちのために「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているか知らないからです」（ルカ23・34）と言われたのです。

人類・民族・諸国家の歴史は、対立と不正に満ちています。第二バチカン公会議の最後に、ポーランドの司教たちがドイツの司教たちに送った歴史的な言葉は、たいへん重要な意味を持つています。「私たちは赦しますから、私たちを赦してください。」ヨーロッパに平和が訪れるとしたら、それはこの言葉に示された態度があつて始めて可能なことでしょう。

今日、私たちはバルカンの兄弟たちにも同じ行動が繰り返されることを祈っています。「私たちは赦しますから、私たちを赦してください。」こうした態度がない限り、平和の樹立は困

不変の教え

「男女平等の尊重が急務」

●女性の尊厳に目をむけよう

生活のあらゆる面での完全な男女平等の尊重は、文明の大きな成果です。女性自らも、心を打つ寛大な日々の証しを通じてこの平等性尊重に一役買っています。特に今世紀には、組織だった運動によって世界の注目が集まることとなりました。

残念ながら今日なお、法律的にはありません。今すぐ神のご計画

を反映した平等の文化を育て、建設的で永続性あるものに仕上げなければなりません。

男女の平等は、実に聖書の最初のページから、創造の驚くべき物語の中で主張されています。「神はご自分にかたどって人間をつくり出された。」(創世1・27)この短かい記述の中に、人間の偉大さの真の理由がうかがえます。人間は神のかた

どりなのです！これは男性にも女性にも等しく当てはまります。男も女も、創造主のかたどりを身に帯びているのですから。

こうした聖書本来のメッセージはイエズスの教えと行いの中に十二分に示されています。当時、女性たちには昔ながらの差別思想が重くのしかかっています。主のやり方は「女性の尊厳を傷つけるものに対する不断の抗議」(『女性の尊厳と使命』15番)でした。まことに主は、大いなる自由と友情にあふれた絆を女性たちとの間に結ば

れました。十二使徒としての役割はお与えにならなかつたものの、女性を復活の最初の証人とし、神の国を宣べ伝え広めるために彼女たちを用いられたのです。キリストの教えの内に女性「自分たち自身の主体性と尊厳」(同14番)を見出します。

創設者である神のみあとに従い、教会は確信をもってこのメッセージを伝えます。時が移り、教会の子供たちのある者が同じ確信をもって生きることを忘れたなら、本当に残念なことです。女性についての福音のメッセージは決して古くなりません。そこで私はもう一度この豊かなメッセージを提示すべく使徒書簡「女性の使命と尊厳」をマリア年に発表したのでした。

永遠の神の御子は、時満ちて女から、女性の鑑・模範であるナザレトの処女から生まれることをお選びになりました。この事実一つからも、女性の限りない尊厳の大きさがわかることでしょう。聖母の助けによって、男性と女性が自らの内にある神秘を見出し、互いを神の生ける「かたどり」と認め、差別なしに生きることができましよう。(六・二五)

7 「われらを試みに引き給わされ、われらを悪より救い給え。」 私たちを試みにあわせなさい！ここで言う試みとは、人間の心を石のように無感覚にし、赦しや合意を求める声に耳をふさいでし、まう誘惑のことであります。それは他者の権利や苦しみに心を閉ざす、民族間の偏見です。また、

ナシヨナリズムをあおり立て、隣人を圧迫し、報復行為をかき立てるような誘惑です。これら全てには死の文化の刻印が見て取れます。

人々が打ちのめされるという悲劇的な光景を前に、コンスタンチノーブルの総主教バルトロメオ一世の言葉を借りて祈りた

道行の祈り) われらを悪より救いたまえ！これもキリストの福音にある言葉です。「私は世を裁くためではなく、世を救うために来た。」(ヨハネ12・47) 人類はキリストを通じ、キリストによる救いに召されています。今回の戦争で引き裂かれた国々も、同じく救いのために召されているのです！

今日、私たちは昔ながらの敵意という試みに打ち勝つことができるよう、十字架の力による助けを祈り求めます。これ以上の破壊は、もうたくさんです！「主の祈り」に従って、私たちは再建と平和の時代が始まるこ

とを祈ります。

すでに葬られたサラエボの死者たちも、私たちと共に祈っています。残酷な戦争の犠牲となつた全ての人が、神の光に照らされて祈り、生者たちのために和解と平和を呼び求めています。

8 「平和のために励む人は幸いです。彼らは神の子らと呼ばれるであろう。」(マテオ5・9) そうです。兄弟姉妹の皆さん、キリストのみが与えることのできる(ヨハネ14・27参照)あの平和をもた

言えましよう。「私たちの平和はキリストである。」キリストのように赦すことができるなら、私たちも平和の担い手となるのです。

「父よ、彼らをおゆるしく下さい。」(ルカ23・34) 十字架上からキリストは赦しを与え、私たちにも十字架の険しい道をつき従って平和に達するようお求めになります。その招きに応じることよつてのみ、利己主義とナシヨナリズムと暴力が死と破壊の種をまき続けるのを防ぐことができます。(…)

平和の元后、われらのために祈りたまえ！ (九四・九・八)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料七百円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 01130-8-72393